

第2子誕生後1か月時における母親のとらえた第1子の反応に対する母親の対応

保田 ひとみ* 坂井 明美** 畑下 博世***

要 旨

本研究は、第2子誕生後1か月時における母親のとらえた第1子の反応（以下、第1子の反応）に対する母親の対応を明らかにすることを目的とする。妊娠36週以降に健康な第2子を出産した母親15人を対象に、産後1か月健診以降2か月未満の時期に半構成的面接を行い、質的帰納的に分析した。結果、第1子の反応に対する母親の対応として4つの大カテゴリーが抽出された。さらにこれらの母親の対応は、第1子の反応を受容した母親の対応と一時的に第1子の反応を拒む母親の対応の2つに分類できた。前者は、第2子を迎えた第1子の気持ちを受け止めた母親の対応で、【第2子に接近させる】、【第1子を安心させる】、【第1子の成長を促す】の3つであった。後者は、母親に余裕がない場合の母親の対応で、【一時的に第1子の行動を拒む】の1つであり、この対応では母親が反省や後悔を伴うものもあった。以上より、第1子の反応を受容した母親の対応の促進と一時的に第1子を拒む母親の対応への支援の必要性が示唆された。

はじめに

第2子の誕生に伴い、第1子は退行や成長的な行動をはじめさまざまな反応を示す¹⁻⁷⁾。そのため、母親と2人の子どもが機能的に相互作用できるようになることは、第2子を迎える家族にとって重要な発達課題であり⁸⁾、母親は上の子に対する関わり方を知りたいと望んでいる⁹⁾。また、第2子以上を出産した母親の育児上における不安や心配では、出産直後から産後1か月までは、「上の子との関係」が多く挙げられるが、産後4か月では減少する¹⁰⁾。よって、第1子との関係や対応に関する母親の不安や心配については、特に、2児の育児が実際に始まる第2子出産直後から産後1か月までを基軸にした支援の強化が重要となる。近年では新しく兄弟になる子どもとその家族を対象としたクラス^{9,11,12)}や家族適応を促す看護介入研究¹³⁾が妊娠中から行われており、今後もこれらの支援はますます発展していくと考える。母親や家族に第1子との関係や対応に関する支援を行っていくには、母親が第2子誕生後の第1子の反応をどのようにとらえどのように対

応しているかを知ることが前提になる。しかしながら、第2子誕生後の第1子の反応に対する母親の対応に関する報告は、1980年代に長子の反応と親の養育態度との関連⁴⁾、2000年代では母親と第1子との関連⁵⁾や態度の変化¹⁴⁾、近年では新しい家族を迎えるクラス前後の母親の気持ちと関わりの変化^{11,12)}などの報告にとどまっている。そこで、本研究では、筆者が先行研究⁷⁾で明らかにした、第2子誕生後1か月時における母親がとらえた第1子の反応（以下、第1子の反応）に対する母親の対応について、引き続き明らかにすることを目的とする。

先行研究⁷⁾では、第1子の反応として、28の小カテゴリーから、[いたわる存在であること]の理解困難な言動 [かわいい・気になるという感情などに伴った興味・関心 (以下、興味・関心)] [愠気]などを示す [第2子への反応]、[離れることへの不安] [ぴったりくっついていたい言動] [気を引く言動]など、寂しく母親・親密な人に甘えたいという [母親・親密な人への反応]、第1子の [成長的行動] を示す [第1子自身の反応] の7つの小カテゴリーと3つの大カテ

* 秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻

** 金沢大学名誉教授

*** 滋賀医科大学看護学科

Key Words: 第2子誕生
第1子
母親の対応
産後1か月

ゴリーが抽出された。また、母親は第1子をよく観察し、理解しようとしていることも明らかになった。本研究は、これらの第1子の反応に対する母親の具体的な対応を明らかにするものであり、第1子への対応に不安を持つ第2子を妊娠中の母親および産後の母親への支援を考案する基礎資料になると考える。

研究方法

調査時期は、2002年4月～2002年9月であった。研究対象者は、2つの総合病院で妊娠36週以降に健康な第2子を出産し、第2子の1か月健診を受けた後、2か月未満の母親に依頼した。第1子は、年齢が第2子の誕生に反応を示す2歳以上で^{6,15)}、語りの中に空想が減少し¹⁶⁾、自立的な行動がとれるようになる5歳未満¹⁷⁾の健康な幼児を選定した。面接の時期は、母親が育児の手助けを最も求めている母親の対応を把握するために、第2子誕生後1か月前後の時期^{18,19)}に設定した。面接日および面接場所は、母親の負担を考慮し、本人の希望を尊重して決定した。データは、母親と第1子の基本情報の聴取と半構成的面接を行って収集した。面接では第1子の反応に対する質問をした後で、「母親がどのように対応しているか」を中心に尋ね、面接内容は対象者の承諾を得て録音または記録し逐語録を作成した。データ分析は、先行研究⁷⁾で抽出された第1子の反応に基づいて行い、最初に第1子の反応の各小カテゴリーに対する母親の対応を抽出しコード化した。次に、コードの類似性と相違性を比較しながら中カテゴリーを抽出し、さらにそこから大カテゴリーを抽出した。データ分析の信頼性と妥当性を得るために、共同研究者間で合意が得られるまで検討した。

倫理的配慮として、研究目的と方法、研究への参加や途中での中断の決定は母親の自由意志を尊重すること、研究と母親が受けている医療サービスは関係がないこと、研究協力を拒否しても母親への不利益はないこと、母親のプライバシーを保護するために固有名詞は匿名にすること、そして研究成果は公表する予定であることを母親に説明して承諾を得た。

結果

1. 対象の概要

対象は本研究への同意が得られた15人であり、母親の年齢は26歳から35歳(平均29.9歳)であった。第1子の年齢は2歳0か月から4歳0か月(平均2歳7か月)であり、性別は男児が10人、女児は5人であった。面接時間は20～90分(平均54分)であり、第1子の同

伴があったものは2人であった。家族形態は核家族が12人、複合家族が3人であった。全ての母親は、出産入院から産後1か月において夫以外に実父母や義父母などからの支援を受けており、全ての第1子は父親と祖父や祖母との関わりを持っていた。また、全ての母親は、看護者、家族、知人および育児雑誌などから第2子の誕生に伴い、第1子が退行現象を起こすことや第2子に憎気するという情報を得ており、できるだけ第1子に関わるように気を配っていた。

2. 第2子誕生後1か月時における母親のとらえた第1子の反応に対する母親の対応

第1子の反応に対する母親の対応として、31の小カテゴリー、12の中カテゴリーが抽出され、そこから【第2子に接近させる】【第1子を安心させる】【第1子の成長を促す】【一時的に第1子の行動を拒む】の4つの大カテゴリーが抽出された(表1)。

また、第1子の反応と母親の対応との関連を表2に示した。母親は第1子が示す〔第2子への反応〕〔母親・親密な人への反応〕〔第1子自身の反応〕のそれぞれに対し、【第2子に接近させる】【第1子を安心させる】【第1子の成長を促す】の対応を、単数あるいは複数組み合わせながら関わっていた。また、第1子の〔第2子への反応〕〔母親・親密な人への反応〕では、母親に余裕がない場合において、【一時的に第1子の行動を拒む】対応がみられたが、〔第1子自身の反応〕には対応がみられなかった。

本研究では、先行研究⁷⁾の第1子の反応の結果に対する母親の対応を明らかにすることを目的としていることから、以下では第1子の反応の結果を再掲しながら母親の対応を記述する。

なお、母親の対応の大カテゴリーには【】、中カテゴリーには〔〕、小カテゴリーには<>、母親と第1子の言葉には「」、研究者が状況を説明するために補った内容には()、人名には[○]の記号、また、先行研究⁷⁾における第1子の反応の大カテゴリーには〔〕、小カテゴリーには[○]を用いる。

1) 【第2子に接近させる】

このカテゴリーは、〔第2子への反応〕〔母親・親密な人への反応〕〔第1子自身の反応〕に対する母親の対応として抽出され、〔第2子に接するようにする〕〔第2子は弟・妹であり大切にすることを教える〕〔第2子への興味・関心に対応する〕の3つの中カテゴリーと6つの小カテゴリーで構成されていた。母親は、第2子誕生後の早い時期から第1子に第2子との対面やスキンシップを促し、第1子に第2子を理解さ

表1 第2子誕生後1か月時における母親のとらえた第1子の反応に対する母親の対応

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
第2子に接近させる	第2子に接するようにする	第2子と対面させる 第2子に関わる役割を与える
	第2子は弟・妹であり大切に関わることを教える	第2子が弟・妹で赤ちゃんであることを教える 第2子に早い時期から触れさせる 第2子に触れる力加減を教える
	第2子への興味・関心に対応する	第2子への興味・関心に応える
第1子を安心させる	第1子の気持ちを受け止める	第1子と母親の2人の時間を作る 第2子より第1子の世話を優先する 第1子と第2子に同時に関わる 構って欲しい気持ちを汲み取って慰める 第1子への愛情を伝える
	努めて第1子を甘えさせる	できる限りだっこする 要望を受け入れてべったりさせる あえて赤ちゃん体験をさせる
第1子の成長を促す	第1子の行動を肯定する	育児の手伝いにお礼を言う 第1子の行動を褒める 一緒に第2子の世話をさせる 状況に合わせて、「お兄ちゃん・お姉ちゃん」と言う 第1子の行動を見守る
	我慢を教える	待つことを教える 順番に対応することを教える
	第1子ができることは自分でさせるようにする	第1子ができることは自分でさせるようにする 少し手伝う
	良くない行為について教える	理由を教えて諭す 理由を教えて注意する 危険行為を禁止する
	関心をそらす	遊ぶ雰囲気を作る 他のことを約束する
一時的に第1子の行動を拒む	余裕がない時は一旦放っておく	構って泣きやまなかったら一旦放っておく
	余裕がない時は第1子を叱責する	母親の気持ちにゆとりがない時は怒る 母親の気持ちにゆとりがない時はたたく

表2 第2子誕生後1か月時における母親のとらえた第1子の反応と母親の対応の関連

第1子の反応	母親の対応	【第2子に接近させる】	【第1子を安心させる】	【第1子の成長を促す】	【一時的に第1子の行動を拒む】
☐ 第2子への反応					
☐ 母親・親密な人への反応					
☐ 第1子自身の反応					

注) 第1子の反応は先行研究⁷⁾より再掲。☐ は第1子の反応の大カテゴリー、【 】は母親の対応の大カテゴリー、印は第1子の反応と対応している母親の対応を示す。

せ、受容できるように対応していた。

(1) [第2子に接するようにする]

例えば、[第2子への反応]では、入院中は第1子が第2子を無視する場合でも、第1子の様子を見ながら「面会の最後は、皆で赤ちゃんを見に行った」というように<第2子と対面させる>対応をしていた。また、母親に第2子の様子を知らせる場合には、第1子にお礼を言って、「また教えてね」と<第2子に関わる役割を与える>というように対応しており、母親は第1子が第2子誕生後の早い時期から第2子に接することができるように意図的に関わっていた。そして、[第1子自身の反応]で、第2子のおむつ替えを自分でするようになる場合には、姉らしくなった第1子の気持ちを受け入れ、おむつのテープは第1子に止めてもらうというように、<第2子に関わる役割を与える>対応をしていた。

(2) [第2子は弟・妹であり大切にすることを教える]

例えば、[第2子への反応]では、弟・妹について理解困難な言動を表す場合には、第1子に「(第2子は)妹だよ」、「(母親の)お腹から出てきた赤ちゃん」というように、第1子に<第2子が弟・妹で赤ちゃんであることを教える>対応をしていた。また、第2子をおもちゃのように扱う場合には、「最初に(第2子が)なんか弱いものだ教えておこうと(家族で)話をしている、「触っちゃダメ」とかは言わなくてだっこさせた。最初から」というように<第2子に早い時期から触れさせる>、「そーっとね」と<第2子に触れる力加減を教える>というように、第2子誕生後の早い時期から第2子は第1子の弟・妹であること、おもちゃじゃなく赤ちゃんであり、かわいく、か弱い存在であることや、第2子に触れる力加減などについて言葉や接触をとおして教えていた。

(3) [第2子への興味・関心に対応する]

例えば、[第2子への反応]では、声をかける見に行く触りたがる場合には、母親も「かわいいね」や「寝んねしてるよ」「いい子いい子してあげー」というように<第2子への興味・関心に応える>対応をしていた。また、母親は「妊娠中から祖父母もみんな『いい子いい子しー』と第1子に言い聞かせてきた」というように、祖父母と一緒に妊娠中から、第1子に第2子をかわいがる方法を教えていた。

2)【第1子を安心させる】

このカテゴリーは、[第2子への反応][母親・親密な人への反応][第1子自身の反応]に対する母親の対応として抽出され、[第1子の気持ちを受け止める]

[努めて第1子を甘えさせる]の2つの中カテゴリーと8つの小カテゴリーで構成されていた。母親は、第1子の第2子への恪気や母親・親密な人に甘えたいという気持ちを受け止め、努めて甘えさせることによって第1子を安心させる対応をしていた。

(1) [第1子の気持ちを受け止める]

例えば、[第2子への反応]では、第2子を無視する場合には、「『第1子だけ(が) 凄くかわいい』という時間を作ってあげたかった」と<第1子と母親の2人の時間を作る>ように対応し、第2子への授乳に抵抗する第2子優先に対して恪気する場合には、「上の子を大事に」という情報を得ていたことから、「しばらくは、下の子を泣かしておいて『(第2子に)ごめんね』と言いながら、上の子を構う」というように<第2子より第1子の世話を優先する>対応をしていた。また、第2子優先に対して恪気するでは、第1子を寝かせる時には、「第2子にミルクをあげながら、片方の手は第1子の手を握って寝かせる」というように<第1子と第2子に同時に関わる>工夫もしていた。また、[母親・親密な人への反応]では、第1子が直ぐに泣くようになった場合には、「その度に、一応慰めた」というように<構って欲しい気持ちを汲み取って慰める>対応をし、愛情の確認をするようになった場合には、祖父の口癖を真似て、「君(第1子)、大好きよ」、「君、宝物ね」と<第1子への愛情を伝える>というように、第1子の寂しい気持ちを受け止め第1子が安心できるように対応していた。

(2) [努めて第1子を甘えさせる]

例えば、[母親・親密な人への反応]では、泣くだっこを求める泣いて訴えるなどを示す場合には、「とにかくだっこを何度もしてあげて、少しでも甘えさせてあげ、安心するようにした」というように<できる限りだっこする>ようにしていた。

べったりするようになった場合には、第1子が手伝いを結構喜んでやってくれることから、「同じべったりでもちょっと楽かな。...泣いてべったり来られるよりは楽かな」というように、何でも第1子と一緒に行動することで、第1子の<要望を受け入れてべったりさせる>ようにしていた。そして、赤ちゃんを真似た行動をとるようになった場合には、父親の対応を真似て第1子を赤ちゃんのように横抱きに抱き<あえて赤ちゃん体験をさせる>ことで、第1子の寂しい、甘えたいという気持ちを充足させるように関わっていた。また、[第1子自身の反応]でも、第2子の存在を人に知らせる我慢するなどの成長的行動が見られた場合には、第1子の気持ちを受け止めて<できる

限りだっこする>ようにしていた。

3) 【第1子の成長を促す】

このカテゴリーは、〔第2子への反応〕〔母親・親密な人への反応〕〔第1子自身の反応〕に対する母親の対応として抽出され、〔第1子の行動を肯定する〕〔我慢を教える〕〔第1子ができることは自分でさせるようにする〕〔良くない行為について教える〕〔関心をそらす〕の5つの中カテゴリーと14の小カテゴリーで構成されていた。母親は第1子の言動を肯定すると共に、第1子が負担にならないように気遣いながら、兄姉としての役割が理解できるように対応していた。また、我慢や良くない行為などを教えるなど第1子のしつても視野に入れた対応をしていた。

(1) 【第1子の行動を肯定する】

例えば、〔第2子への反応〕では、第2子を かわいがる 場合には、第1子に「ありがとね」「気持ちいいね」と<育児の手伝いにお礼を言う><第1子の行動を褒める>というように対応し、「基本的には一緒に(第2子)の世話をさせる」と考え<一緒に第2子の世話をさせる>ようにしていた。さらに、〔第2子への反応〕〔母親・親密な人への反応〕〔第1子自身の反応〕では、自分で役割を決めて第2子を かわいがる 母親の手伝いをする 自分でするようになる 場合には、「ありがとう、お兄ちゃんやね」と兄として役割を果たしてくれる第1子を褒めるが、同時に第1子に負担を掛けないように<状況に合わせて、「お兄ちゃん、お姉ちゃん」と言う>ように関わっていた。一方、〔母親・親密な人への反応〕では、第2子に 自己顕示欲を示す 場合にも、母親は第1子が第2子より優位に立ちたい気持ちを察し、同様に<状況に合わせて、「お兄ちゃん、お姉ちゃん」と言う>というように関わっていた。また、〔第1子自身の反応〕では、人形を可愛がる仕草をする ようになった場合には、「(第1子の行動について問いかけると) 照れてしまい...もう一度やってもらおうと思ってもしてくれないので、黙って見ている」というように<第1子の行動を見守る>ことで、第1子の成長を促す対応をしていた。

(2) 【我慢を教える】

例えば、〔第1子自身の反応〕では、第2子の世話中は第1子が自分の要望を 我慢する ようになった場合には、「用事が終わったら直ぐに(第1子の所へ)行く」というように、我慢している第1子を気遣いながら<待つことを教える>対応をしていた。また、〔母親・親密な人への反応〕では、おっぱいを欲しがり、飲む 場合には、「順番ね」と言って<順番に

対応することを教える>というように第1子に我慢することを教えていた。

(3) 【第1子ができることは自分でさせるようにする】

例えば、〔母親・親密な人への反応〕では、今まで自分でできていたことをしなくなる 場合には、「やっぱり、行ったら行ったで(第1子は)納得するのか、(排泄を)済ませて戻ってくる...今だけかなと思って自然にまかせるつもり」というように、<少し手伝う>が、第1子の様子を見ながら<第1子ができることは自分でさせるようにする>ようにしていた。また、〔第1子自身の反応〕でも、第1子は 自分でするようになる が、途中でできなくなる場合には、母親が<少し手伝う>ことで第1子の成長を促していた。

(4) 【良くない行為について教える】

例えば、〔母親・親密な人への反応〕では、おもちゃ屋さんで だだをこねる ようになった場合には、おもちゃ屋さんへ出かける前には「(誕生日までは)おもちゃを買わない」と<理由を教えて諭す>や 赤ちゃんを真似た行動をとる 第1子が第2子のベビーベッドに上がった場合には、「(第2子が)つぶれるから降りて」と<理由を教えて注意する>というように、良くない行為の理由が第1子に理解できるように教えていた。また、〔第2子への反応〕では、第1子が 第2子から母親・親密な人を遠ざける ために祖母を攻撃的に押した場合には、祖母が第1子を好きであること伝えた上で、「そんなことしたら、お母さんも、君(第1子)のことを押すよ」と言って、祖母を押すという<危険行為を禁止する>というように対応していた。

(5) 【関心をそらす】

例えば、〔母親・親密な人への反応〕では、第1子が だだをこねる 場合には、「構うと構うだけ、わけが分からなくなるので、...何かビデオをつけてあげるとか、お菓子をさっと出したり...」というように<遊ぶ雰囲気を作る>ことで第1子の機嫌を元に戻すように関わっていた。また、 反発する 場合には、「帰ってきてから散歩に行こう」というように<他のことを約束する>ことで、第1子を納得させていた。

4) 【一時的に第1子の行動を拒む】

このカテゴリーは、〔第2子への反応〕〔母親・親密な人への反応〕に対する母親の対応として抽出され、〔余裕がない時は一旦放っておく〕〔余裕がない時は第1子を叱責する〕の2つの中カテゴリーと3つの小カテゴリーで構成されていた。母親は第1子の気持ちを受け止めて関わろうとしていたが、多忙な時間帯や母

親が疲労・ストレスなどを感じている時に、だだをこねる 反発する などの反応が持続したり、第2子に危害が及ぶ恐れがあると、一時的に第1子の気持ちを受け止めることができず、一旦放っておく、叱責するという対応をすることがあった。そのため、この対応では母親の反省や後悔を伴うものもあった。

(1) 【余裕がない時は一旦放っておく】

例えば、【母親・親密な人への反応】では、母親が忙しい夕方に、第1子がだだをこねる 場合には、「ちょっと構って泣きやまなかったら、(納得するまで、何をして泣きやまないことを理解しているため)勝手にしてみたい感じで…」というように「構って泣きやまなかったら一旦放っておく」という対応をしていた。

(2) 【余裕がない時は第1子を叱責する】

例えば、【第2子への反応】では、母親が第1子から離れた時に、第2子を おもちゃのように扱う 場合には、「(遊びだと理解していても)さすがに少し怒る」というように、「母親の気持ちにゆとりがない時は怒る」と対応をすることもあった。しかし、第1子も低年齢のため対応が難しく、「怒ってもかわいそう」と感じることから、「どっちも赤ちゃん」と思って接するように努め、母親自身が苛立たないようにしていた。【母親・親密な人への反応】でも、母親が疲労を感じ、「ちょっと1時間くらい寝たい」と思っている時に、第1子がだだをこねる 反発する などの反応を示すと、「やっぱり『わーっ』となる」というように「母親の気持ちにゆとりがない時は怒る」と対応をしていた。しかし、母親は「反抗期と(第2子誕生が)重なった」や「(第1子は)自分で(感情を)コントロールできない」と理解していることから、第1子への対応の難しさを感じていた。また、第1子が 気を張りつめる 反応を示していると理解している場合でも、「寝かしつけているのに寝ないと、自分も色々ストレスがあるため、イライラする」と語られ、「たたいてしまうが、泣くと、横で一緒に寝て、泣きながら眠っていった上の子の寝顔を見て後悔する」というように「母親の気持ちにゆとりがない時はたたく」場合もあったが、同時に直ぐに後悔をしていた。

考 察

第2子誕生後1か月時における母親のとらえた第1子の反応に対する母親の対応として、4つの大カテゴリーが抽出された。これらのうち、【第2子に接近させる】、【第1子を安心させる】、【第1子の成長を促す】の3つは、第2子を迎えた第1子の気持ちを受け

止めた母親の対応であり、【一時的に第1子の行動を拒む】の1つは、母親に余裕がない場合において、第1子の気持ちを一時的に受け止めることができない対応であった。よって、前者は第1子の反応を受容した母親の対応、後者は一時的に第1子の反応を拒む母親の対応というように分類し、以下にこれらの対応について考察する。

1. 第1子の反応を受容した母親の対応

Rubin²⁰⁾は、子どもは家族が増えることに対して、「喜びや特権を失ったり諦めたりすることへ根強く抵抗する。自分たちの子どもたちにそうした剥奪を受け入れさせるという現実の母性課題は、赤ん坊が生まれたときに熱心に始められる」と述べている。本研究においても母親は、特権を失い第2子への憎気や母親・親密な人への反応を示す第1子の気持ちを受け止め、第1子と母親の2人の時間を作る、「宝物」という祖父の口癖を真似て第1子に愛情を伝えるというように【第1子の気持ちを受け止める】対応や、できる限りだっこする、父親の対応を真似てあえて赤ちゃん体験をさせるなど、【努めて第1子を甘えさせる】対応をすることで、【第1子を安心させる】ように意図的に関わっていた。また、第1子が第2子への憎気から祖母を押すなど良くない行為をした場合には、祖母の第1子への愛情を伝え、一旦第1子を安心させた上で、【良くない行為について教える】というように関わっており、【第1子の成長を促す】対応に繋げていた。このように、本研究の母親は第1子との関わりの随所で、母親だけではなく、親密な人もこれまでどおり第1子を大切に思い、愛情を注いでいることが分かるように第1子に伝えて安心させ、第1子が失った特権を諦められるように対応していた。これは、第2子誕生に伴い第1子が退行現象や憎気などの反応を起こすということに気を配り、第1子の反応をよく観察し、理解するように努め、第1子がどのような場面で、誰に、どのような反応を表すかととらえていた²¹⁾本研究の母親の成果だと言える。

本研究では、【第1子の成長を促す】母親の対応が多く抽出され、先に述べた【良くない行為について教える】以外においても、第1子に兄姉の負担を掛けないように【第1子の行動を肯定する】【我慢を教える】【第1子ができることは自分でさせるようにする】【関心をそらす】など、第2子を迎えた第1子の気持ちを気遣いながら、幼児期の精神の自立に必要な躰²¹⁾を視野に入れた対応が行われていた。宇田²²⁾は、子どもの心の動きを受け止め、理解し、それに沿った対応やしつけが行われると、子どもは情緒面が安定し、自己統

制(がまんする, 聞き分ける, 待つ)を身に付けると述べている。本研究の第1子は我慢する反応を示していたことが多くの母親から語られ, 中には我慢できると喜びを表す第1子もみられた⁷⁾。これは, まさに本研究の母親における第1子の反応のとらえ方と母親の対応が, 効果的なしつけに結び付くことを表すものであった。よって, 第1子の反応に対する不安を持つ第2子を妊娠中の母親や産後の母親には, まず第1子の反応についての情報を提供し, 次いで第1子の気持ちを理解し, それに応じた対応をすることの重要性とその方法を伝えていく必要があると考える。

大月ら⁸⁾は, 第1子を積極的に育児に巻き込んだ家族は, 第2子誕生後3か月において『きょうだい関係の芽生え』や『第2子受容』が見られるが, 『第2子回避』という対処をとった家族は, 第1子と第2子の相互作用が認められなかったと報告している。本研究の母親も, 第1子を育児に巻き込むことで同様の成果が得られていた。しかし, 本研究で特徴的であったのは, 母親は第1子を育児に巻き込む以前に, 第1子が第2子の存在を理解できていないことに着目し, 【第2子に接近させる】対応を取っていたことである。具体的には, 第2子誕生後の早い時期から【第2子に接するようになる】, 言葉や接触をとおして, 第2子はおもちゃではなく【第2子は弟・妹であり大切にすることを教える】, 第2子への興味・関心に母親も同調して【第2子への関心に対応する】というように関わっていた。【第2子に接近させる】という母親の対応は, 母親と第1子が第2子を共有し言葉や接触といったコミュニケーションをとおして行われるため, 第1子に第2子の理解を促すだけでなく, 母親と第1子, および第1子と第2子の相互作用も促進する対応と言え, 本研究でもこれらのことを支持する結果を示していた。

以上より, 【第2子に接近させる】, 【第1子を安心させる】, 【第1子の成長を促す】の3つの母親の対応は, 第1子の反応に効果的であったことから, 第2子誕生後の早期から1か月において, 意図的に取り入れていく対応であることが示唆された。

2. 一時的に第1子の反応を拒む母親の対応

本研究の母親は, 寂しく母親・親密な人に甘えたいという【母親・親密な人への反応】を受け止め, 【第1子を安心させる】対応をしていたが, 母親に余裕がない時に, 第1子が「だだをこねる」反発する

おもちゃのように扱うなどの反応を示す場合には, 困難を感じ, 【余裕がない時は一旦放っておく】【余裕がない時は第1子を叱責する】などの, 【一時的に第

1子の行動を拒む】対応をし, 反省や後悔を伴うこともあった。また, この母親の対応は, 結果的に第1子に寂しい思いをさせていたことから, 第1子の成長を阻むことが推測され, 本研究においても【第1子自身の反応】には対応がみられなかった。

母親が【一時的に第1子の行動を拒む】対応をする第1子の反応の主な原因は, 低年齢や反抗期などの発達に関係し, 母親の主な原因は, 多忙な時間帯や疲労・ストレスなどが関係していた。これらは, 都築ら¹⁰⁾が, 上の子との関係はすでに子を持つ母親に固有の内容であり, 直ぐには解消しにくい問題であり, 継続する可能性もあると述べていることを支持するものであり, 同時に, 第1子への対応が困難になった場合には, 母親の叱責が当たり前になる¹¹⁾ことも危惧されるものである。一方, 本研究では, 低年齢の第1子への対応に困難を感じた母親が, 「どっちも赤ちゃん」というように発想を転換し, 母親自身が苛立たないように工夫していた。

よって, 【一時的に第1子の行動を拒む】対応への支援では, 妊娠中は母親が困難だと感じる第1子の反応や母親の対応についての情報を提供し, 第2子誕生後の早期から1か月においては, 個々の母親の困難を把握し, 母親および家族に応じた介入をすることが重要だと考える。同時に, 母親の対応の工夫を引き出し, 保証することも必要である。

3. 研究の限界と今後の課題

本研究で明らかになった母親の対応は, 第2子誕生後の第1子をよく観察し, 理解しようとしていた母親が対象であった。今後は, 対象の幅を広げ検討する必要がある。

結 論

第2子誕生後1か月における母親のとらえた第1子の反応に対する母親の対応として, 【第2子に接近させる】, 【第1子を安心させる】, 【第1子の成長を促す】, 【一時的に第1子の行動を拒む】の4つの大カテゴリーが抽出された。これらはさらに, 第1子の反応を受容した母親の対応と一時的に第1子の反応を拒む母親の対応に分類でき, 第1子の反応を受容した母親の対応の促進と一時的に第1子の反応を拒む母親の対応への支援の必要性が示唆された。

謝辞

本研究の遂行にあたりご理解, ご協力をいただきましたお母様方ならびに施設の看護責任者の方々に心か

ら感謝申し上げます。

文 献

- 1) Dunn, J., Kendrick, C.: Siblings: Love, envy, and understanding, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1982, pp24-57
- 2) Nadelman, L., & Begun, A.: The effect of the newborn on the older sibling: Mothers' questionnaires, In M. E. Lamb & B. Sutton-Smith (Eds.), Sibling relationships: The nature and significance across the lifespan, Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, 1982, pp13-37
- 3) 天富美禰子: 同胞葛藤に関する研究 次子出生に対する長子の反応と同胞関係 . 大阪教育大学紀要第 部門31(2・3) : 175-187, 1983
- 4) 天富美禰子: 同胞葛藤に関する研究 次子出生による長子の反応と親の養育態度との関連 . 大阪教育大学紀要第 部門32(2・3) : 145-157, 1984
- 5) 小島康生, 入澤みち子・他: 第2子の誕生から1ヵ月目までの母親 第1子関係と第1子の行動特徴. 母性衛生42(1) : 212-221, 2001
- 6) 大月恵理子, 森恵美子: 第2子出生前後の第1子の反応と家族の認知. 母性衛生43(2) : 332-339, 2002
- 7) 保田ひとみ: 第2子誕生後1か月時における母親のとらえた第1子の反応. 日本助産学会誌18(2) : 9-20, 2004
- 8) 山崎あけみ: 3歳になる第1子を気遣いながら4人家族を形成するプロセス. 日本助産学会誌17(1) : 35-46, 2003
- 9) 中村紋子, 片岡弥恵子・他: 新しく兄姉になる子どもと家族のクラス「赤ちゃんがやってくる」の実施と評価. 日本助産学会誌20(2) : 85-93, 2006
- 10) 都築千景, 金川克子: 出産後から産後4か月までの子どもをもつ母親に生じた育児上の不安とその解消方法 第1子の母親と第2子以上の母親における比較 . 日本地域看護学会誌3(1) : 193-198, 2001
- 11) 須藤宏恵, 片岡弥恵子: 第2子妊娠中から産後にかけての母親の第1子に対する気持ちと関わりの変化 新しい家族を迎えるためのクラス参加前後に焦点をあてて . 聖路加看護学会誌11(1) : 19-28, 2007
- 12) 片岡弥恵子, 須藤宏恵・他: 幼児と妊娠中の母親および家族への性の健康クラスの影響 クラスに参加した母親の気持ちと家族の反応の変化から . 日本助産学会誌22(2) : 158-169, 2008
- 13) 大月恵理子: 第2子出生に伴う家族の適応を促す看護介入に関する研究. 日本母性看護学会誌6(1) : 9-14, 2006
- 14) 江守陽子: 第二子出産後の母親の二児に対する養育比率と第一子に対する態度の変化. 母性衛生42(1) : 60-67, 2001
- 15) 天富美禰子, 水野幸子・他: 弟妹出生における長子の生活の変化と反応について. 小児保健研究40(6) : 517-521, 1981
- 16) 岡本夏木, 麻生武: 年齢の心理学 0歳から6歳まで. ミネルヴァ書房, 京都, 2000, pp160
- 17) 岩田純一: わたし の発達 乳幼児が語る わたし の世界. ミネルヴァ書房, 京都, 2001, pp67
- 18) 服部祥子, 原田正文: 乳幼児の心身発達と環境. 名古屋大学出版会, 名古屋, 1991, pp144-145
- 19) 神谷整子, 大沢文子・他: 母子保健における助産婦のあり方に関する研究 産後1か月までのケア及び支援に関する研究 産後1か月までのケア及び支援に関する褥婦のニーズ, 平成6年度心身障害研究 : 308-313, 1995
- 20) Rubin, R. 著, 新道幸恵, 後藤桂子訳: ルヴァ・ルービン母性論 母性の主体的体験. 医学書院, 東京, 1997, pp73
- 21) 菅俊夫: 発達心理学. 法律文化社, 京都, 1996, pp55
- 22) 宇田倫子: 第2子出産に際する第1子の心理を支える. ペリネイタルケア21(9) : 14-17, 2002

The responses of mothers to the reactions of their first-born children during a one-month period following the birth of a sibling

Hitomi BODA* Akemi SAKAI** Hiroyo HATASHITA***

* Akita University Graduate School of Health Sciences

** Professor Emeritus of Kanazawa University

*** Faculty of Nursing, School of Medicine, Shiga University of Medical Science

This study aimed to investigate the responses of mothers to the reactions of their first-born children during a one-month period following the birth of a sibling. The subjects in the study consisted of fifteen women who gave birth to a healthy second child after 36 weeks' gestation. Semi-structured interviews were conducted with the subjects during a one-month period, beginning at the newborn's one-month checkup, and ending at the second month after birth. The subsequent qualitative and inductive analysis of the data resulted in the extraction of four categories demonstrating how mothers dealt with their first child's reactions, and these were further classified into two groups—those who were accepting of their first child's reactions, and those who became temporarily unreceptive to their first child's reactions. The first group was comprised of three categories of mothers who “make the first child approach the second child”, “reassure the first child” and “encourage the first child's growth”, thus showing empathy for the first child following the sibling's birth. The second group formed a fourth category, wherein the mothers felt overwhelmed and “temporarily rejected the actions of the first child”. This response was at times accompanied by feelings of remorse or regret on the part of the mothers. These findings suggest the need to continually encourage mothers who responded in a way that was accepting of their first child's reactions, as well as to support mothers who respond by becoming temporarily unreceptive.